

令和 5 年 5 月 6 日現在

機関番号：18001

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2019～2021

課題番号：19H04357

研究課題名(和文) 戦後沖縄社会の再建と「引揚げエリート」 台湾・満洲の「専門職引揚者」を中心に

研究課題名(英文) Rebuilding of Post-war Okinawa and Elite Repatriate

研究代表者

野入 直美 (Noiri, Naomi)

琉球大学・人文社会学部・准教授

研究者番号：90264465

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 7,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の成果はおおきく二つに分けられる。第一は、引揚者在外事実調査票データを用いた台湾、満洲・沖縄引揚者の定量分析である。それによって、沖縄における台湾、満洲引揚者それぞれの階層的特徴と、神奈川と沖縄の満洲引揚者の比較による沖縄引揚者の地域的特徴を析出した。第二は、米軍統治下の沖縄において戦後再編の担い手となった台湾、満洲引揚者の事例研究である。製糖業とパイン産業という当時の沖縄における二大基幹産業を牽引した実業家、基地建設労務者の労働運動を率いた活動家、琉球政府副主席を務めた政治家など、多様な領域において重要な役割を果たした引揚者の実像をとらえた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、引揚を戦後に続く社会現象として捉えることができた。戦前から戦後にかけての時間軸を設けて引揚者の階層移動を析出した定量研究として、また米軍統治下の沖縄社会を引揚というフレームを通じてとらえ直した新たな沖縄現代史として、本研究は意義をもっている。また定量的研究と定性的研究を併せた引揚の総合的な実証研究として新しい試みとなっている。

研究成果の概要(英文)：we could reveal postwar repatriate as a social phenomenon that had continued after the war. Firstly, we quantitatively examined change of social and occupational status on the repatriates in Okinawa. Secondly, we qualitatively discussed the cases of repatriates. Furthermore, we comprehensively clarified post-war Okinawa under the U.S. military occupation with the new framework of repatriate. Our research is one of few comprehensive approaches which studied repatriate quantitatively and qualitatively.

研究分野：比較社会学

キーワード：引揚げエリート 米軍統治下・沖縄 台湾引揚者 満洲引揚者

## 1. 研究開始当初の背景

従来の引揚研究は、政策、引揚過程と記憶が中心となり、戦後に重要な役割を果たした引揚者を十分にとらえてこなかった。戦後の農業開拓に加わり、炭鉱労働者となり、市場を形成した引揚者の研究はそれぞれに行われてきたが、引揚者を層として、階層の視点から定量的に分析した研究はきわめて少ない。引揚研究における戦後の射程は、アジアへの日本企業進出と引揚の関連を論じた小林ほか（2008）、住宅や商店に残る引揚史をとらえた島村ほか（2013）、海軍技術者に光をあてた沢井（2019）らによって広げられてきた。しかし安岡健一（2014）が指摘したように、本邦への帰還をもって引揚とみなすのではなく、戦後社会へと連続していく現象として引揚をとらえる研究は、十分には行われてこなかった。

## 2. 研究の目的

本研究は、「引揚エリート」という視角から、引揚者が戦後社会の中いかに包摂され、さらに戦後社会の再編にどのように影響を及ぼしてきたのかを、定量分析と事例研究によって総合的に考察するものである。対象とする時空間は、米軍統治期（1946～72年）の沖縄である。なかでも1950年代という、いまだ本土復帰が展望できない時期において、引揚者が戦後沖縄の再編において果たした役割を考察する。引揚者の中には、日本帝国の勢力圏において医師、教師、官公吏や鉄道従業者などの専門・熟練職に就き、また高等教育や職業訓練を受けてきた人びとがいた。本書では、彼らを「専門職引揚者」として可視化するため、とくに台湾と満洲からの沖縄引揚者に光をあてる。

ここでいう「引揚エリート」とは、専門職引揚者を中心に、地域リーダー、労働運動の活動家、国際交流の担い手、政治家、実業家など、さまざまな領域で社会を担ってきた引揚者を意味する。本書では、外地<sup>1</sup>における職業経験をひとつの資源として社会の中間・上層にのぼり、戦後社会の再編をすすめた台湾、満洲引揚者に着目する。「引揚エリート」は、社会的な成功者のみに光をあてるためではなく、むしろ引揚者の多様性を階層の視点によって明らかにするためのフレームである。それはまた、援護対象とされてきた引揚者を、戦後社会の再編に関与してきた能動的なアクターとしてとらえなおすための枠組みである。

## 3. 研究の方法

定量研究では、主に引揚者在外事実調査票データを用いて、台湾、満洲引揚者が戦後の沖縄社会において、どのような階層に包摂されたのかを定量的に析出する。ここでは専門職引揚者を層として可視化し、引揚者の中の多様性を階層の視点によって明らかにする。また沖縄以外の都道府県のうち、先行研究のある神奈川・茨城・広島と沖縄との満洲引揚者の就労分布を比較し、沖縄引揚者の特徴について考察する。

第二部では事例研究によって、引揚者が戦後沖縄の再編においてどのような役割を果たしたかを明らかにする。そこでは、<引揚>という新しい視点からとらえなおされた、もうひとつの沖縄戦後社会が浮かび上がる。ただし本書は、沖縄の特殊性を究めつつ、沖縄だからこそ可視化できる専門職引揚者という類型を、そして帝国期と脱帝国期、外地と内地とを貫く連続または断絶を、沖縄以外の地域にも通底する広がりをもつ現象として見出そうとしている。沖縄の台湾引揚者については、医療（松田 2013）と教育（藤澤 2016）において引揚者が果たした重要な役割が指摘され、「帝国主義的キャリア」に着目した帰還移民論（松田 2021）も刊行されている。本書は、それらの先行研究を踏まえつつ、台湾だけでなく満洲からの引揚者を射程に含め、階層分析による俯瞰と事例研究による肉迫によって、戦後社会に接合した引揚研究を切り拓くことを目指している。

## 4. 研究成果

学術図書『戦後沖縄の再編と<引揚エリート>—台湾、満洲の引揚者を中心に』として2024年3月に刊行される予定である。

定量分析で、渡邊は、戦前の職業分布を外地と沖縄住民で比較し、台湾と満洲の渡航者には、沖縄では就くことのできない専門・熟練職、たとえば満洲の製造業、台湾の官公吏・事務職に就いた者がいたことを示した。これは、外地渡航によっていまだ農業社会であった沖縄を脱出し、大都市や工業地帯のある帝国圏で、いくらかの沖縄出身者が階層を昇らせたという上昇のベクトルとして読み取れる。

また野入は学歴変数を扱い、台湾における就学経験が引揚後の高い階層性につながっていた可能性を論じ、台北帝国大学とその医学専門部卒者が最上層となりつつ、実業学校と職業訓練校卒者に分厚い「実学系のキャリア層」があることを明らかにした。これも、外地渡

航による階層上層のベクトルと見なされた。しかし医師がこうして層を成したことは、逆に、日本統治下の台湾における沖縄出身者が宗主国民の中のマイノリティであったことを反映している。台湾の沖縄出身者は、医師を含めての実学・実務家集団であった。宗主国民として本土出身者よりも一段、劣る位置にいたからこそその実学への集中と考えられる。

日本統治下の台湾における沖縄の若者は、移民としては第一世代、または植民地生まれの第二世代であることが多かった。官公吏に就く沖縄出身者には、本籍を沖縄県外に転籍し、姓を改めることで「琉球人」差別に対処する人もいた。そのような時空間において、多くの沖縄出身の若者が医師を志し、彼らを含めて実学系が分厚かったのである。そのことは、戦後の沖縄では階層性の高さをもたらしたが、日本統治下の台湾においては「琉球人」差別の所在を反映するものでもあったと考えられる。台湾の沖縄出身者は、実学を修めることでマイノリティから脱けようとしていたのではないか。沖縄の「引揚エリート」という階層性は、沖縄出身者がもともと帝国圏における宗主国民の中のマイノリティであったこと、外地渡航はそこから脱出する回路としての意味をも有していたことを踏まえてとらえられねばならない。

台湾、そして満洲の沖縄出身者は、すべての人がそうではないが、相対的には沖縄にいる住民と比べて階層性が高かった。しかし全国の中に位置づけると、不利な立場に置かれたマイノリティ層であった。そのことは、戦後の沖縄における引揚者にも当てはまる。

台湾、満洲引揚者の公務就労比率の「高さ」は、きわめて象徴的である。沖縄における台湾、満洲引揚者のおよそ1割が公務に就いていたことは、当時の沖縄住民に比べれば3倍差となるが、本土では引揚者の失業対策が行われ、引揚者のおよそ2割が公務就労であった。沖縄に比べると、ほぼ2倍である。引揚者に対する失業対策から取り残された、マイノリティとしての沖縄が浮かび上がる。しかし自力で公務に就いた沖縄の引揚者に対し、本土には、失業対策による臨時雇用で公務員となり、のちに常勤となった引揚者が一定数、存在した。公務に就いた引揚者の従業上の地位を沖縄—全国で比較すれば、興味深い相違が浮かび上がるかもしれない。

本研究の強みは、定量分析と定性分析を相互に参照し、知見を更新することができることにある。それにより、定性研究でとりあげた事例を、定量研究の視点でとらえなおすことができた。

沖縄の引揚エリートの最上層には、外地渡航の前に本土進学し、その学歴を資源として外地で階梯を昇った高度人材がいた。事例篇における松川久二男、泉有平のふたりが該当する。彼らが進学した本土の私学と帝国大学は、それぞれ台湾、朝鮮と深く結びついていた。本土進学には、青年を帝国圏の高度人材へと歩ませしていく回路がはさまれていたのである。直接に沖縄から外地へ渡った者と比べると、本土進学を經由した者は、外地に着いた時点ですでに特権的な階層に分岐していた。本書が扱った引揚エリートの中で最上層にいる松川と泉は、米占領下の沖縄で、実業界と政界に位置づいた。

彼らに続く上層には、台湾で高等教育を受け、いくらかの者はそのまま台湾で、あるいは沖縄に引揚げてから専門職に就き、引揚前後で専門性が継続しているという類型がある。事例篇では、終戦時には琉球官兵となっていた専門職者たちの中に該当者がいる。

それに続く中層には、高等教育を沖縄で修めてから外地へ渡航した類型、事例篇における玉井亀次郎がいる。沖縄の教育水準は本土だけでなく台湾と比べても低かったため、この層は本土・台湾進学者の下になる。彼らは、学歴的には上層に劣るが、それを補って余りある利点として、沖縄の同窓人脈を享受した。この中間層は、引揚後、外地経験にプラスして、強力な地元性を駆動する。玉井にとっての沖縄県立農業学校の同窓人脈は、その一例である。

専門職引揚者の中でもっとも下にいるのは、低学歴で外地へ渡り、職業訓練生となった層で、事例篇における林義巳が該当する。林は満洲で労働運動を知り、のちに沖縄で、戦後初のストライキを成功に導いた。ただし林は、活動家の実績によって引揚エリートに位置づくだけでなく、外地における職業訓練校の重要な役割を照らし出す事例でもある。このような実学系下層もまた、引揚エリートを構成する重要な層であった。

定性研究では、これまで戦争犠牲者としてとらえられることが多かった引揚者の受動的なイメージをくつがえす能動的なアクターとして引揚者をとらえるという意図のもとで設けられた。そこで前提とされたのは、外地で培った専門性を活かし、能動的、主体的に戦後沖縄の再編を担ってきたという「引揚エリート」像である。

それらの事例を、引揚者の能動性、主体性、戦後沖縄に及ぼしたインパクトという視点で俯瞰すると、ふたたび、沖縄の中では卓越し、しかし全国的に見ればマイノリティという両義性が浮かび上がる。もしも沖縄の引揚エリートが、日本に通用する特権階級であったのなら、彼らは米占領下の沖縄における厳しい抑圧状況を突破する動きを、沖縄のため、あるいは自分のビジネスのために展開したのではなからうか。しかし、そこまでの行動を示した引揚エリートは見いだせなかった。泉有平は、日本政府による離島振興を誘致したが叶わず、自身の能動性よりも動員・配置された文脈において、戦後沖縄に対して影響力を及ぼした。玉井亀次郎は、沖縄本島においてパイン産業を萌芽させるという重要な貢献を果たしつつ、日本政府の貿易自由化による沖縄パイン産業への打撃を阻めなかった。復帰後の振興策に

命脈をつないだのは製糖業で、宮城仁四郎とその企業グループについてはさらなる分析が可能であろう。本書の事例篇の中には、米軍統治の抑圧を突破するほどの引揚エリートはいなかったが、それは彼ら自身の階級的優越性の限界、帝国圏における上層にすでに見えていた限界でありつつ、それ以上に、日本から切断された沖縄の状況に強く規定されていた。引揚エリートは、主体的に専門性を発揮する一方で、米軍統治下の沖縄をとりまく構造的な時空間に埋め込まれており、その文脈においては受動的な存在であった。

そのとき、最もアクティブな引揚エリートが最下層から出たことは興味深い。外地経験と人脈をフル活用した活動家、林義巳である。本書がとらえた引揚エリートの多くは、米軍統治に対し、葛藤をはらんだ複雑な関わりをもってきた。松川久二男の「剣とペン」が示すように、彼らは、対米協力をする受益者層／米軍統治に抵抗する被害者層という単純な二項対立ではとらえがたい〈生〉を生きてきた。その中で林だけが、まったくブレないのである。階層としては、林のように外地の職業訓練校を出たグループには、外地でも沖縄でも郵便局に勤めたというような地道な勤労者もいる。林がその階層において、代表的であるよりむしろ異彩を放っていることには留意を要する。一方、沖縄の労働運動が、奄美経由で満洲からもたらされたエートスと人脈によって萌芽していたことは示唆的である。戦後の労働運動を外地引揚というフレームでとらえ直す研究には、沖縄に限定されることのない可能性が広がっている。

本書の引揚エリート研究は、社会的な成功者だけに光をあてるものではない。層としての引揚者を追う中で浮かび上がったのは、沖縄引揚者における軍雇用の低階層性である。それは、神奈川と沖縄の米軍基地における引揚者を比較することで鮮明に見えてきた。

沖縄の軍雇用の分析からは、戦前の満蒙開拓団員が、戦後の基地警備員になるという職業移動の類型があることが見いだされた。かつて、日本帝国の支配を実体に見せかけるために満洲に送出された元満蒙開拓団員が、終戦から10年を経て、米軍基地を背にして銃を持ち、「戦果」<sup>ii</sup>を得ようとする沖縄住民に対して基地を警備していたのである。その姿は、帝国一脱帝国の連続性を一身に凝集したようでありつつ、米軍統治下の沖縄における戦禍と戦後、侵攻と軍占領を貫く連続性をも明るみに出しているように思われる。

引揚者と軍雇用をめぐる研究は、韓国やフィリピンの米軍基地と人口移動に射程を伸ばせば、国際比較研究に発展させることができるだろう。

---

<sup>i</sup> ここでいう外地は、植民地政庁が置かれていた台湾、関東州、朝鮮、樺太、南洋群島に、日本帝国の主要な勢力圏であった満洲国を含めている。

<sup>ii</sup> ここでは米軍からの奪取物品を意味する。ガソリン、煙草、食品、金属類などがあつた。基地内で働く作業員が雇用主から与えられる贈り物も戦果と呼ばれることがある。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計11件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 8件）

1. 著者名 Sumiyo Nishizaki	4. 巻 72(2)
2. 論文標題 Review of Dear China: emigrant letters and remittances.1820-1980,	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 The Economic History Review	6. 最初と最後の頁 782-783
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1111/ehr.12860	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 菅野 敦志	4. 巻 4
2. 論文標題 1940年と1964年の 東京オリンピック と台湾人選手	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 オリンピックスポーツ文化研究	6. 最初と最後の頁 101 - 124
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 菅野 敦志	4. 巻 3(2)
2. 論文標題 羅家倫與1950年代台灣的簡體字論戰	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 當代日本與東亞研究	6. 最初と最後の頁 1 - 12
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 蘭信三	4. 巻 15
2. 論文標題 「帝国崩壊と人の移動」研究への道程	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 コスモポリス	6. 最初と最後の頁 23-31
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 菅野敦志	4. 巻 40
2. 論文標題 「二二八平安運動」の提唱と台湾社会における和解：蘇南洲・彭海瑩インタビュー記録	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 共立国際研究	6. 最初と最後の頁 143-160
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 菅野敦志	4. 巻 4
2. 論文標題 剣とペンと台湾引揚者：松川久仁男にみる戦後沖縄の再建	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 国土館人文科学論集	6. 最初と最後の頁 55-78
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 菅野敦志	4. 巻 45
2. 論文標題 外国人初の台湾二・二八事件被害者認定の軌跡：青山恵昭インタビュー記録	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 社会システム研究	6. 最初と最後の頁 227-246
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 菅野敦志	4. 巻 1
2. 論文標題 The Rehabilitation Movement over the 2.28 Incident under KMT Rule (1987-1997): Reexamining the transition from “confrontation” to “reconciliation”	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Journal of Contemporary East Asia Studies	6. 最初と最後の頁 1-20
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 佐藤量	4. 巻 34(2)
2. 論文標題 満洲における日本人住居の形成と展開	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 立命館言語文化研究	6. 最初と最後の頁 19-36
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 蘭信三	4. 巻 28
2. 論文標題 日本移民学会にとっての「ポストコロニアル移民」研究：その回顧と展望	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 移民研究年報	6. 最初と最後の頁 95-98
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 蘭信三	4. 巻 1
2. 論文標題 Repatriation, Settlement, "Left-behind," and "Smuggling": Racial Migrations in East Asia after World War	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 大和大学社会学部研究紀要	6. 最初と最後の頁 45-61
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件(うち招待講演 2件/うち国際学会 1件)

1. 発表者名 八尾祥平
2. 発表標題 沖縄コザ事件
3. 学会等名 中央研究院台湾史研究所『島嶼與大陸 民族主義與國家形成脈絡中的核心邊陲關係』(招待講演)(国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 西崎純代
2. 発表標題 満洲から戦後日本へ：南満州鉄道引揚者の戦後の職業活動
3. 学会等名 立教大学経済史・経営史ワークショップ（招待講演）
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計7件

1. 著者名 蘭 信三、川喜田 敦子、松浦 雄介	4. 発行年 2019年
2. 出版社 名古屋大学出版会	5. 総ページ数 352
3. 書名 引揚・追放・残留	

1. 著者名 渡邊 勉	4. 発行年 2020年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 352
3. 書名 戦争と社会的不平等	

1. 著者名 野入直美	4. 発行年 2021年
2. 出版社 みずき書林	5. 総ページ数 368
3. 書名 沖縄-奄美の境界変動と人の移動	



1. 著者名 野入 直美	4. 発行年 2022年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 372
3. 書名 沖縄のアメラジアン	

1. 著者名 蘭 信三、松田利彦、李 洪章、原 佑介、坂部 晶子、八尾 祥平	4. 発行年 2022年
2. 出版社 みずき書林	5. 総ページ数 728
3. 書名 帝国のはざまを生きる	

1. 著者名 蘭 信三、小倉 康嗣、今野 日出晴	4. 発行年 2021年
2. 出版社 みずき書林	5. 総ページ数 512
3. 書名 なぜ戦争体験を継承するのか	

1. 著者名 佐藤量、菅野智博、湯川真樹江	4. 発行年 2020年
2. 出版社 東方書店	5. 総ページ数 368
3. 書名 戦後日本の満洲記憶	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

## 6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	飯島 真里子  (Iijima Mariko)  (10453614)	上智大学・外国語学部・准教授    (32621)	
研究分担者	佐藤 量  (Sato Ryo)  (20587753)	立命館大学・先端総合学術研究科・非常勤講師    (34315)	
研究分担者	蘭 信三  (Araragi Shinzo)  (30159503)	大和大学・社会学部・教授    (34453)	
研究分担者	西崎 純代  (Nishizaki Sumiyo)  (30802110)	立教大学・経済学部・特任教授    (32686)	
研究分担者	菅野 敦志  (Sugano Atsushi)  (70367142)	共立女子大学・国際学部・准教授    (32608)	
研究分担者	中村 春菜  (Nakamura Haruna)  (80846866)	琉球大学・人文社会学部・講師    (18001)	
研究分担者	八尾 祥平  (Yao Shohei)  (90630731)	東京大学・大学院総合文化研究科・特別研究員    (12601)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	渡邊 勉  (Watanabe Tsutomu)		
研究協力者	松田 良孝  (Matsuda Yoshitaka)		

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関